

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2007 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	英米文学専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部 教授		菊池 清明 印		
自然・人文の別	人文		個人・共同の別	個人	
研究課題名	Gawain 詩人の方言意識				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科 英米文学専攻 博士課程後期課程 2年		貝塚 泰幸 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2007 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

14 世紀イングランドにおいて、英語は地域的な差異が顕著であった。 Geoffrey Chaucer は、その方言的な差異を「笑い」という文体的な効果を目的として使用した、英文学史上最初の詩人として評価されている。 現代の中世英文学研究において、Chaucer とともに研究者の注目を二分する Gawain 詩人の方言意識とその文体的効果について、*Sir Gawain and the Green Knight* における現在分詞語尾の用法を手がかりとして、研究した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[*Sir Gawain and the Green Knight*] [方言意識] [英語の多様性]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 14 世紀イングランドにおける英語の状況:

キリスト教の伝来、ヴァイキングの侵略、そしてノルマン・コンクエストなど他民族によるブリテン島支配は、英語に継続的な言語接触をもたらした。これにより 14 世紀イングランドにおいて、英語が書き言葉としての地位を再び取り戻すころには、話し言葉においてのみならず、書き言葉においても顕著な地域的差異を示すようになった。Geoffrey Chaucer は、このような方言的な差異を認めつつも、克服しようとする意志を *Troilus and Criseyde* の結び “*envoi*” において表明している。事実、Chaucer は文体的な効果を目的として、方言を *The Reeve's Tale* のなかで用い、見事な「笑い」の効果を得ている。文学作品における文体的な効果を狙った方言使用は、これが英文学史上最初の試みだと言われている。しかし、同時代の詩人である *Gawain* 詩人は、これまでの先行研究から、Chaucer に勝るとも劣らない技術を兼ね備えた詩人であることが証明されている。したがって、*Gawain* 詩人が当時の混沌とした言語状況を Chaucer と比較してどのように捉えていたのかは興味深い問題である。

そこで、*Sir Gawain and the Green Knight* における現在分詞語尾の用例を手がかりとして、*Gawain* 詩人の方言意識について考察した。中英語期において現在分詞語尾は、北方では *-ande*、中部では *-ende*、南部では *-inde* というように、その語尾によって方言的な差異を非常によく示していた。また、*-ande* と *-yng* とでは音節の数が増える上に、*The Oxford English Dictionary* は、Northumberland や Scotland 南部において、現在分詞として *-an*、動名詞として *-in* というように、使い分けがされていることに言及している。これは音声的な差異を明らかにするばかりでなく、中英語期において音声的な差異が現代英語以上に著しかったであろうことを容易に推測させる。このような中英語期における現在分詞語尾に見られる音声的・音韻的・形態的な特徴を手がかりとして、同詩人の方言意識を探る。

2. *Sir Gawain and the Green Knight* における現在分詞語尾:

先行研究は、本作品の方言と書かれた場所とが Cheshire 周辺であることを明らかにした。一方で、詩人の方言意識に関する研究はこれまで皆無である。Cotton Nero A.x. 写本に含まれる 4 つの作品は、その主題においてだけでなく、その言語使用においても一貫性を認めることができる。そのもっとも顕著な例として現在分詞語尾があげられる。本作品における現在分詞語尾は、一貫して *-ande* が用いられる。しかしながら、例外もある。研究者によって差異はあるものの、*Pearl* 1175 行目 “*sykyng*”, *Gawain* 753 行目 “*sykyng*”, 2126 行目 “*gruchyng*” を、すべての研究者が共通して指摘している。本作品における例外的な現在分詞語尾 *-yng* は、概略的に見て南部方言の特徴であるといえる。それにもかかわらず、J.P. Oakden は方言的な特徴を考慮すれば、現在分詞語尾として *-yng* の使用をあり得ない例ではないとしている。確かに、この指摘は *A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English* によっても裏づけられる。しかし、一貫して *-ande* を用いていた詩人の態度が、これら 2 つの例外を際立たせているとも言える。

研究成果の概要 つづき

本作品における現在分詞は 33 例ある。これらを現在分詞の主語という観点から分類すると 2 つの例外は、主語が **Gawain** であるときにしか現れないという興味深い事実が理解できる。最初の例外的用例である 753 行目の動詞“**syke**”は、奥方の科白の直後にも見られる。しかし、そこでは“**sykande**”となり、その対照性は際立つものとなっている。さらに、753 行目の用例の直前には、現在分詞“**carande**”が用いられていることもあり、**-ande** から **-yng** への交代移行は注目に値する。2126 行目“**gruchyng**”は、動詞“**syke**”のように二つの異なる語尾が用いられているというわけではないものの、この現在分詞が用いられる環境は“**sykyng**”と同様である。登場人物の科白の前後に見られる現在分詞の用例に限定すれば、**Gawain** が主語であるとき以外には **-yng** が用いられないことから、これらは極めて顕著な例外であるといえる。

当然、詩人の方言意識を認めるには、これら 2 つの用例では少なすぎるという印象は否めない。しかし、これまでの先行研究により本作品においてはわずかな用例であっても、そうしたわずかな用例が物語の展開上、重要な役割を果たしていることが明らかにされている。たとえば二人称代名詞、敬称“**you**”と親称“**thou**”の交代移行は、登場人物同士の心理的な距離感を、また緑の騎士に一度だけ付与される、伝統的に神やキリストにのみ用いられる性格形容辞“**hende**”は作品の喜劇性を実に見事に描出させている。また登場人物が用いる誓言について比較すると、**Gawain** が頻繁に誓言を用いているのに対して、緑の騎士はわずか一度しか用いていない。これは本作品の主題を考える上で意義深い用例であるといえる。さらには、本作品において頻繁に用いられる“**man**”を表す同義語についても詳細な研究がなされている。この用法においても、緑の騎士が **Arthur** に対して用いるわずか 1 つの用例が皮肉や嘲りといった文体的効果を狙って用いられていることが主張されている。本作品において用例の少なさは、むしろ示唆に富む重要な要素であるといえる。

3. *Gawain* 詩人の方言意識:

現在分詞語尾の差異から、登場人物に方言差を反映させようとした意図が明らかになってくると、これまでにない詩人の新たな一面が見えてくる。*Gawain* 詩人も **Chaucer** 同様、現在分詞語尾に見られる顕著な方言的差異を利用して、文体的な効果を狙って巧みに活用している。登場人物にそれを反映させることによって、当時の混沌とした英語という言語の状況を把握していたとも言える。これまで、英文学史において方言を最初に文学の要素として用いた功績とその榮譽とは、**Chaucer** にのみ与えられてきた。しかし、14 世紀において *Gawain* 詩人もまた方言の多様性という言語環境を肯定的に捉え、文学作品に取り入れることでそれを克服しようとした詩人であると言える。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 研究発表

日本中世英語英文学会 第23回全国大会 2007年12月8日 於 駒沢大学
「Gawain 詩人の方言意識」